2023年度　311ゼミナール　グループ外の活動

311ゼミ1期生の現職教員と語り合う
防災教育の現状と課題

＜日時＞2023年11月18日（土）
＜場所＞宮城教育大学430教室
＜講師＞
　水谷彩佳さん　　（美里町北浦小学校教諭）
　三浦美咲さん　　（気仙沼市大谷小学校教諭）
　　※いずれも2019年度の311ゼミナール発足時の一期生
＜参加者＞
　ゼミ生20人

１　水谷(旧姓・長谷部)彩佳さんのお話

〇311ゼミに所属した理由

・石巻市門脇小６年の時に東日本大震災に遭う
・裏山の日和山に避難
→もし山に逃げていなかったら自分は生きていたのだろうか？
→宮教に入り、避難体験に向き合い直すため、311ゼミに所属

〇311ゼミでの活動で得られたこと

・想定外でもベターを考えて行動する
・学校周辺の土地や地域についての知識を持つ
・日々の指導が避難行動に大きく影響する
・訓練に対する考えや子どもへの声掛けに自信が持てた

〇 美里町立北浦小学校での防災教育

年間7回の避難訓練を行っている
・地震避難訓練及び引き渡し訓練
・水害避難訓練
・ミサイル・竜巻・原子力避難訓練
・火災避難訓練
・休憩時避難訓練3回(業間・昼休み・掃除時間)
・防災教室
→避難グッズを作る、避難バッグの中に何を入れるか、AED(？)の使い方・・・心肺蘇生法
・あんしん教室
→留守番時に災害が起きたら・・・アルソックやセコムと連携、防犯も
　４年生の社会科で防災教育について学ぶ

〇取組みと課題

①児童の保護者との連携
・防災手帳を配る
→保護者からの提案。先生、児童、保護者の防災意識が高まった
→沿岸部とは違う避難訓練でゆるいなあと思っていたところの提案
・担任を離れると保護者とのかかわりが少なくなったため、単発的な取り組みになった。

②引き渡し訓練の方法の改善
【令和３年度】　(当日避難訓練あることを知って、やり方分からないまま実施)
・名簿等で時間や引き渡した相手を記録するという共通理解がなかった
→校長も疑問視
・保護者の身分確認を子供にやらせていた

【令和4年度】
・体育館に受付を設置し、身分確認を行って一人ずつ保護者に引き渡し
→体育館に行列ができ、時間がかかった。(兄弟が中学校にいる保護者は特に大変)

【令和5年度】
・体育館の受付を2箇所に増やし、身分確認を行いひとりずつ保護者に引き渡し
→耐震性のある校舎（311でも壊れなかった。体育館より強い！）を使った引き渡しも可能なのではないか
・各学年の担任が引き渡しを行ったらよいのではないか
・なんと毎年避難訓練の方法が毎年異なっていた
→計画を毎年見直して結構大変だった

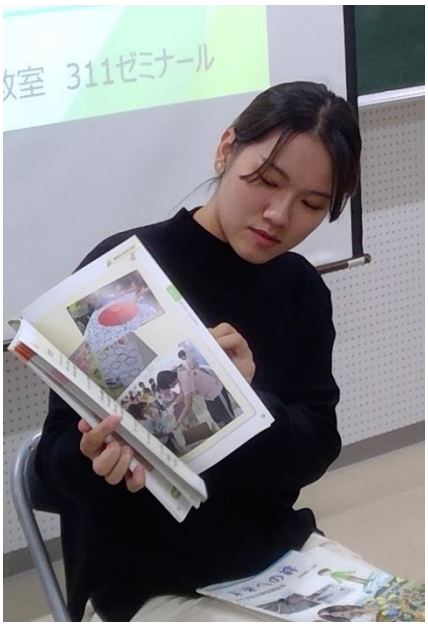
【令和６年度】
・教育計画を毎年見直し、作成する
→自分の考えや行動で全体が変わる。防災意識を持っていない先生だけだと、なあなあになっちゃう

〇日常的な指導の大切さ
・話を聞くこと、自分で考えること、素早く行動することを授業を通して身に着けさせる
・児童が自分の身を自分で守る防災教育
→教員が話しても、手遊びしたり友達と話したりして聞いてないと考えられない子どもに、考えられないと行動もとれない。
→そんな児童を育てるために教師がどのような働きかけをするといいのかは手探りで日々悩んでいるところ、、、

〇ゼミ生へのエール
・ゼミ活動が続いていて嬉しい！
・いろいろな人の話を聞いてできることを考えて行動してほしい

２　三浦美咲さんのお話

〇３１１ゼミに所属した理由



・宮城県の南三陸町出身
・名足小6年生の時に被災
・避難場所がどんどん改善
→これがきっかけで先生になりたい！
→宮教に入り、311ゼミに所属！

〇防災教育・災害対策の取り組み

大谷小学校：地域の人も温かく子供たちも素直
【避難訓練等】
・下校時避難訓練
　下校時に避難場所を確認しながら帰る
・幼小中合同避難訓練
　小学校の人だけで避難するのではなくて、公民館の人や幼稚園や中学校の人も一緒に。

【職員の研修】
・気仙沼市震災伝承館、大川小見学
・佐藤翔輔東北大災害研准教授の講話
・千田地蔵について学ぶ
→震災の時、交番の警察官で住民の避難誘導中に津波に巻き込まれて殉職した千田浩二さんをしのんで大谷小の入り口交差点に地蔵が立てられた

【会議等】
・大谷地区防災連携協議会
　地域の人たちと会議
・防災マニュアルの見直し

〇身近な災害への備えを調べる活動

４年生社会での実践
「身近な災害への備えを調べる活動」
・大谷小の近くを歩いてみよう
→意外と学校の近くに災害に関わることあるぞと気づく
・子どもの家の災害時の備えを調べてきてもらう

〇防災主幹や地域との協力

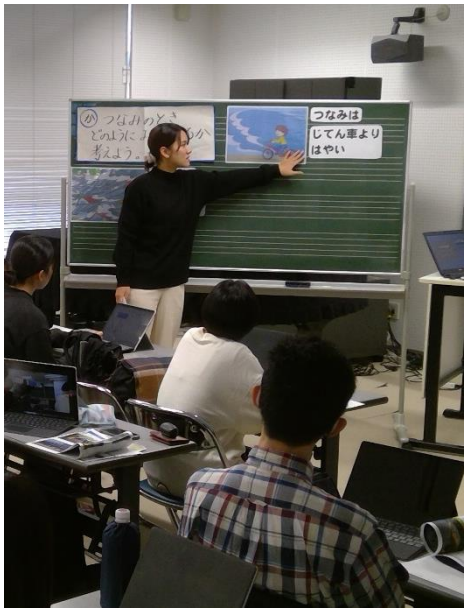
・備蓄倉庫を案内してもらう
・災害時に市の職員はどのようなことをするのかを教えてもらう

〇これまでの学習を「いかす」活動避難所シミュレーション

・おばあちゃんと弟がいるから早くしないと間に合わない

・情報を確認してから避難する
→様々な場面を想定して自分ならどうする？を考えさせる
→自分で考えるとやっぱり違う

〇模擬授業（２年生向け）
三浦さんは学校で取り組んでいる防災の授業をゼミ生相手に再現してくれた
【導入】
以前に実施した避難訓練を振り返り、津波について事前の知識を確認する
・「つなみ」ってどんなイメージ？
・海の近くにいるとき地震に遭ったら？津波は大丈夫かな？
今日の課題
「つなみのときどのようにみをまもるかかんがえよう」



【展開】
・絵から津波について知識をもたせる
・実際の津波の災害の写真を見せる
→自分たちがいつも過ごしている学校がこんな風になっていたなんて、、
→泳いで逃げる！とかいう子もいなくなった

【まとめ】
・ワークシート
→子どもたちが自分で考えて教訓を作る
・２通りの避難経路（大谷海岸から大谷小まで）を見せて「どちらの方が安全に逃げられる？」

〇実践を通しての課題
・知識だけの学習ではなく、いざという時に体が動くかが大事
　知識を使って考えて、判断する活動が必要
・被災体験を話すだけでは伝わらない。
→今の子たちは震災を経験していない世代
→経験と模擬授業のような内容を組み合わせればより効果的なのでは？

〇ゼミ活動がどのように役立っているか
・サイエンスショーで学んだことを理科の授業で生かす
建物には固有振動数がある
・ゼミ活動を振り返り、初心に帰る
一方で、避難訓練はやっているが、いざ地震が来たときに慌ててしまった
→忙しいから考えなくてよいのではない！

〇ゼミ生へのエール
教員になってもならなくてもゼミでも活動は絶対にいきてくる！

３　語り合い

Q　学校現場でどのように防災教育が行われているか？

水谷さん：自分は沿岸部での実践をしてきたが、内陸の学校に行くと平和ボケ・・・
沿岸部と内陸の先生とで防災教育に対しての意識の差に驚き。
沿岸部のことを知らない先生が多く、沿岸部の先生も変えたくても変えられない
周りの先生を動かすのはなかなかできない
研修でいろんな先生と話す機会があったが、一人一人の認識の違いでやっている
ことが全然違う！
誰が指揮するのか、その先生は来年いるのか、新任の先生にだれが伝えるのか
→被災経験をもっている先生は水谷先生だけ・・・（1/12）
震災の記憶を持っている先生は多いが、「あれはしょうがないと思う」（大川小）
という意見があり、当時の先生の考え方が衝撃的だった、その中で防災について
発信していくのは難しいな…

三浦さん：現状はけっこうしっかりやっている。沿岸部は津波から逃れられない。
地域との連携がしっかりしている。一緒に避難訓練も（ボランティア、学校評議
員など）
→被災経験を持っている先生は多い。どの先生も沿岸部での経験があり、震災の
時にも指導していた先生がいた。

Q　教科教育や総合学習で防災はやれる？

水谷さん：三浦さんの実践を見てやっている、やれるんだなと思った。
やったかやっていないかは子供と先生しか分からないのでやってもいい。
カリキュラムをどこまで超えていいのかわからない、、

三浦さん：（指定校だった）去年までは研修なども行っていた
カリキュラムでいっぱいいっぱいで、自由にできるものではない。
実践も4年生の社会の授業でやったり、2年生は学活の1時間、総合で防災のこと

もやるがそれだけになってしまう
一年を通して防災を言い続けるのは難しい。どうしても単発になってしまう

Q　地震が実際に起きたとき、今の小学生はどうしている？

水谷さん：指示を待たずにすぐ机にもぐる。
大きい地震が一回しかなく、しかもモノを移動しながらだった。先生の指示が早かったから？
緊急地震速報があるため、携帯を近くに置いておく
地震が起こる前から指示を出すようになった

三浦さん：子どもたちは自分で机の下に入る。隣のクラスで机を動かした音でももぐる。
ちょっとでもゆれたり地鳴りしたりしたら疑わしくても入る！
→防災への意識高い
机がないと慌てる、体育館の避難の仕方が分からない
→本来ならダンゴムシポーズ、頭を守るポーズをするけど、、、
机がないときどうするかが課題

Q　漫画や紙芝居などで東日本大震災の経験を次世代に伝承し、防災教育に生かそうと考えているが、授業の研究の中で伝承媒体を用いたものがあるか？また、子供たちにとって受け入れやすい媒体とは？

水谷さん：４年生　ユーチューブの避難ドラマを熱心に見ている子ども
アニメ・漫画なども興味をひくのではないか

三浦さん：宮城県の冊子「宮城防災教育副読本」
さっきの実践例もここから引用。経験談も含まれている
絵はとっつきやすい（低学年は特に）→学年が上がると文字が多くなり、より専門的な知識が含まれる
→使っているのは副読本だが、漫画でも興味はひけると思う

Q「伝承」について

水谷さん：大きいことは言えないし、できないが、来年度以降は防災の事をやってきたことと、3年間の経験を生かしていきたい。
先生の住んできた環境や価値観、変化を嫌う学校の特性があるため、防災の事を教壇に立ってすぐにはできないが、ちょっとずつやっていきたい。
→3年目はやっぱりあんまり言えない・・・上層部で完結しているなあ、という印象、言えば変わる。（が、校長教頭にもよる）

三浦さん：自分たちの経験を話して子どもから同情を得たいのではなく、防災について自分ごとのように考えてほしい
先生が話すだけではだめ。伝えたいのは「逃げれば助かるから自分でできるように」「自分の命は自分で守るんだよ」ということ。教員はファシリテーターで、教えるだけではダメ。今の教育現場では子ども自身が考えて判断できるようにしていくことが求められている。

Q　通常学級から変わったことでお二人の変わったところは？学級の感じとか

水谷さん：学年を持っていると教えなきゃいけないことがあるが、特支は実態に合わせて教育内容を決める。訓練においても特別支援学級の子たちで繰り返し行う。一つの事でも３，４回練習してから本番を迎えるようにしている。

三浦さん：自分の気持ち的に変わったこと、立ち歩きや暴言のある子ども(軽く学級崩壊)に対してカチンとくることもあった。

特別支援学級で自閉症の子供と一緒になったら、去年の子たちも困ってたんだと思った。

障害特性的にゴールを達成させ、完璧にできなくてもOKと思えるように。「生意気な奴！」という認識ではなく「困ってたんだな」という少し優しい気持ちに

私たちは不満や辛さを言葉に出してストレスを低減しているが、特別支援学級の子供たちはそれを表出できずに爆発してしまうことがあると考えると良い。

Q　教員が忙しく、去年、昨年のものをそのままやるというお話もあったが、教材研究の時間はあまりない・・・？

水谷さん：時間と体力があればできる、5時間をどうしよう・・・と考え、45分を45分以上かけて考える毎日。1年の見通しが持てない、やりたいことが分からなくなるくらいいっぱいいっぱい

国語が苦手。なのに時数が多い。苦手だからやろうと思うと苦しいから好きな教科を！と思うが、なかなか思うようにいかない・・・。

楽しい事に時間を注いで楽しい授業に

三浦さん：教材研究する時間があればいいのに・・・と毎日思っている。

学校には研究授業、指導主事訪問があってそのときはみんな一生懸命やるが、いっぱい考えてたくさん準備した授業は子供たちの顔が違う。それを知っているが毎日それができるわけではない。朝行って教科書ひらいて、１，２分で内容を考えて教える。

理想を描いてやるとそれができなくて苦しくなった友達もいる

逆にそれでいいんだと思うしかない。

毎時間の板書計画を作ったほうがいいと言われ、分かってはいるが、全教科の板書計画を作っていたら寝る時間がなくなる・・・泣

自分の好きな教科からやる！自分が楽しくできることから始める。

国語や算数は授業が難しいから今も勉強中。

Q　大学中にやっておけばよかったなと思うこと

水谷さん：教科書を読み、この学年でこのことをやるんだと把握すること。現場に出てからその時間はない。系統性を見ると見通しを持てる。

おかしいなと思う子供について、いろんな特性があって、支援が必要だったり一言で変わるんだということを学んではいるが、自分の見方を考えることも大事。

三浦さん：大学の授業を使う場面が少ない（と思っていた）。

大学のときは免許を取るために勉強していた。学校の先生になってみてあのときの講義もう一回受けたい！と思うことが多い。自分の姿をイメージして講義を受

けていたら現場に出た時にもっと使えたかも。あとは本をもっと読んでおけばよかった。読む時間がないし、活字を読む体力もない・・・。
大学のうちにもっと遊べばよかったなあ～。いろんなところへ行った経験は子どもたちに還元できる。
旅行に行っても演劇を見ても色んな人とコミュニケーションをとっても全てが研修！
子どもたちに将来伝えられる
先生だけが忙しいわけでもないし、先生だけがやめたいわけでもない。3日、3週間、3か月、3年を乗り越えていく。経験を積まないと仕事は続けられない。

Q　モチベーションは？

水谷さん：1年目「一人前の教員になりたい」2年目「結婚するし！」3年目「旦那さんとストレス発散する余暇の時間」、将来的に産休、育休をとれたらいいなあ

三浦さん：子供たちの成長がモチベーションになる。いくらつらくて嫌なことがあっても、授業でいい顔したり成長が見られたりすると、自分もっとできるかもと思える。
学校の中だけではなく、外にもモチベーションを作ることが大事（温泉とか）
教採でも「リフレッシュの仕方」をよく聞かれる、職場でも多趣味な方が多い

Q　授業中に地震が起きた時に心掛けている声掛けなどはある？

水谷さん：落ち着いて」と自分に言い聞かせる。パニックにならないように。

三浦さん：自分に言い聞かせる。ちょっと揺れただけでもこれまでの避難訓練など防災の経験が頭の中を巡る。
「もぐります」「落ち着きます」と言う。騒がしくなるが、放送があるので静かにするように声を掛ける。

Q　子供から大人への還元もあると思うが、防災教育に関して地域や保護者の意識を変えられたエピソードがあれば。

水谷さん：防災手帳を配るときに話したりする（その子供と家庭は意識が高かった）
家庭はそれぞれで、家庭でそのような話をしているか分からない。

三浦さん：子どもたちにアンケートを取ったりしていた。お家で話しますか？という項目は結構低い。自分の家ではちょっとの地震でも話し合いしたりするので驚いた。自分のうちで備えているものを紹介してねという活動で、自分の家にないと気付く家庭も。開いてみると賞味期限が切れているなど、家庭での防災に少しだが役立っている。

Q　沿岸部の学校で行う教育を知っていて、内陸の学校の防災にないものでやった方がいい活動は？（例　地域活動など）

水谷さん：沿岸部だと地域が強く、防災の意識が高い。
先生は入れ替わるが地域は残る。幼保小中連携、地域での連携はどこでも。
水害の避難所が川の近くにあったことに対して、？と思ったら発信するのは先生。やっていくのは地域の人や新しく来た先生。地域との連携が重要

三浦さん:歌津中学校でやつた避難所訓練がめんどくさかった・・・が、実際使えること！

少年防災クラブだったのでポンプ車をもっていかなければならないことも…
身に付けていて損はないスキル。
内陸でも川の氾濫や土砂崩れがある。

〇まとめ

水谷さん：防災教育は命を守ることにつながる。
相手と自分の命を大事にしないからいじめ、自殺の問題がある。
防災教育で命について考えられるように。
大人のサポートがある大学生のうちにやりたいことを提案してやっていく姿勢を大切にしてほしい。

三浦さん：学校の先生になってしまうと自由な時間が限られる。
学生のうちにゼミの活動で自由にできたりいろんなところに行けたりする。
行ってこうだったな、だけではなく、そこから何を学んだか、学校でどう生かしていくかを考える。学生らしい柔軟な考えでできることを！